

おさんの穴

284  
3  
168

館書圖京東

函二二 門新

架〇一 部七

號 類三

091594-000-1

特66-138

おさんの穴

望月誠/著

M12

DBO-0038

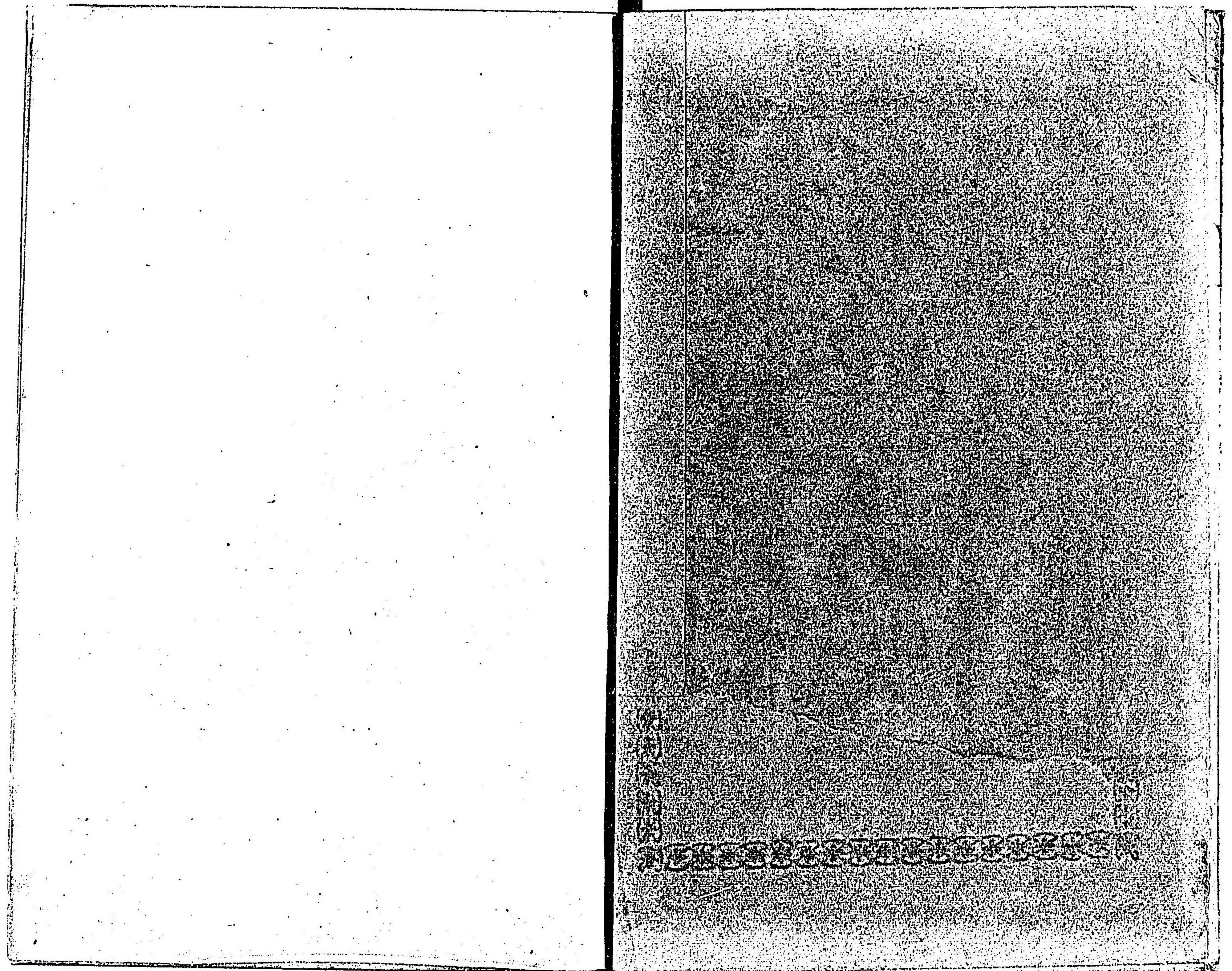


翌月減載著

定價十錢

於興泰の穴全

明治十二年  
八月發行  
思誠堂藏版





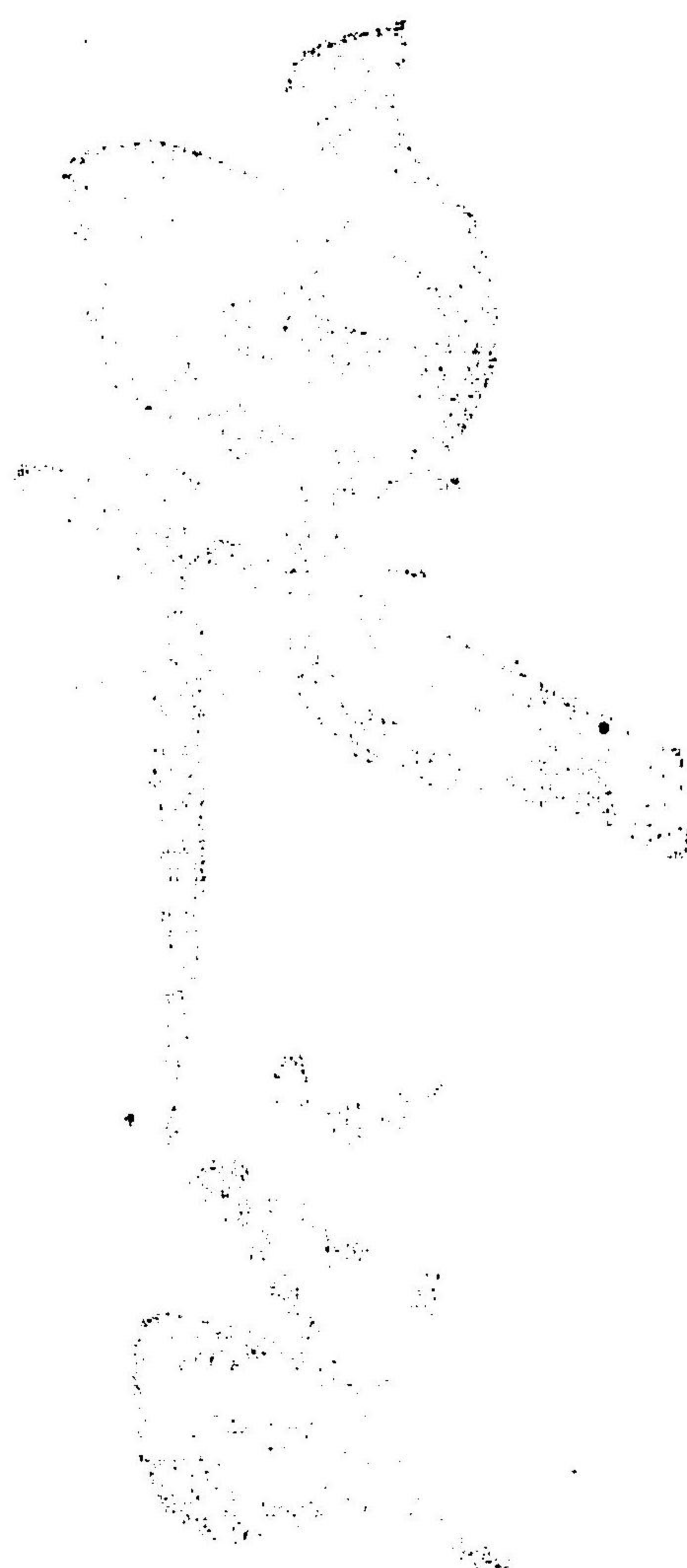
惟此茶也

女

之

甲

第



おさんの穴あな

望月誠巖著

○おさんの氷こおりを汲くみみ飲のみと炊かくことの外ほか烹調にたをも  
兼かねて勤つとむる者もの十じふ又また八はつ九くなきバ倫食つまらぐひの權全けんまく  
その手てに歸かへるがゆる先まづ鹽梅見あんばいみとて食物しょくものの半なか  
熟にえのうちから一ひと摘つまを始はじめ烹成あがるまでまに念入ねんいれ  
に三度さんどまでも鹽梅見あんばいみをな一ひと最も一つお増まよ小皿こざら  
又また分わけて雪隠せうげん或またハ物置もの置きなどの片隅かたぐみ人の見ぬ所ところ

よてむしやくやらくやらかそなんぞの最もその權  
 を恣ほしまにいたるものといふべし但し尋常つまらの倫食くひ  
 の見みて見ぬふりもできれど何分なにぶん見遣みわしがたき  
 の指ゆびをなめて砂糖さとうの中なかに入いれるなどよてたど  
 へおさんの身みなりとて人の唾つばをなめるの餘あま  
 り心持こころもちよきこともあるまじ。さそれバその心持こころもち  
 よなりて少せうし我慢がまんしてもらひたきことなり  
 又水またみづを子抄おこく飲のむることとも同おなト理りよてその惡わるい





といふことぐらゐの知てもゐる筈ながら怠惰  
 者ハ茶碗に盛ぐ手敷を厭ふて人の看ぬ間にち  
 よろまかそこと多し斯る家の者ハ忝くもおさ  
 んどの、臭氣高き菌尿を項戴するこどもあ  
 らんと思へば豈胸のひろきことならずや  
 ○使の途中近所のおさん仲間と道伴になるとき  
 ほどかく互に主家の事を悪く喋るものなれど  
 これいたし自分の恥をさらすのとならず何の

利益にもならずこれが爲めに日間どれて使の  
 歸りおのづと遅くなれば果して主人の氣元わ  
 るく自分より求めて不首尾を醸その理なれど  
 それに頓着もせせして喋るのり定めて其中に  
 言のれざるほどの甘味あるべし今爰にその摸  
 様を大略申さんもしくお松さんおまえの家  
 でいどうだか知らあいが私の所でのそれい  
 人使の悪いこと、云たら一つの買物をして歸

れバ大層遅かつた道州を喰つたらうのヤレこ  
 の大根の高價あの牛蒡の細いとそれからマ  
 お聞きなさいよ物を煮れば鹹いといひ汁を煮  
 れバ濃いといひ夜だとしてなかくたいの置き  
 ませんソレ雜巾をさせ麻をうめとなん不給金  
 と出したからとてあんまりトやあまませんかど  
 云へば「それはお松  
 ませんよまた私の家でい且的搦て示の氣よし

で何にも構ひぬけれど此このこ指さをなかくあ  
 かにしで人使ひとつかひのわるい上に主人しゅじん風かぜを吹ふかして  
 マーほとんどよサ何なにんぞといふとそれが奉公ほうこうだ  
 それが奉公ほうこうだと云いつて人を犬猫いぬねこ同様に思おもつて  
 るの何なんといまゝといトやアありません  
 が。そして三度さんどのお餞かざもろくなもの喰くひせ  
 しないのでそよドン（午砲）おやもう十二時じふにじでそ子  
 一お歸かへるとまた遅おそいとかぐづゝ云いはれるのだ

ドレ行いきまま去さやう。さよならお松まつへいさよなら。また  
 今こんをんね湯ゆでゆつくりお竹たけかならず今こんをんなど、  
 いふの紋切形もんぎりがたなれば若もしおさんこの所ところを讀よみ  
 たらんに必かならず胸むねに針はりとらたる、の思おもひをな  
 せならん  
 ○買物かひものの「がうさき」をはたらくなどのことい最いと  
 悪いわるいことよて正ただしく云いへば立派りつぱの盗賊どろぼうなり然さ  
 ると自分じぶん勝手がたに「がうさき」ぐらゐるの事ことの盗賊どろぼうと

のいられぬこれのちの一時のお慰まだなど  
 ど心にゆるし最初一銭の額よて僅よ一厘やら  
 かしたのも次第よ増長して二厘三厘となり終  
 には焼芋二銭の額よて五厘もはねるゆゑなん  
 不芋が高いとて餘り少いといふところから尻  
 が割れてさきぐお拂ひ箱となるのい定法な  
 れば愚といふもなほ餘りあり又主家の米味噌  
 醋油などを盗まて己の家におくりなせする者

往々あれど是れ又自分よその慾に蔽はれて  
 盗賊と名の附くほどのことには有るまじと思  
 へども既よ前にも云へるがごとく錢一厘盗ま  
 ても又米一合盗まても同ト盗賊なれば深く慎  
 むべきのこのことなりとぞ  
 ○奉公人の根情として住込の當座ハ万事に意を  
 注けて朝も早く起き出れど段々馴れるに隨て  
 事よ忽よし朝も亦晏く起き甚だしきハ主人の

呼び起よびおこそも虚眠そらぬして更に返辭へんじせき呼ぶことと三  
 四回よつどいに至いたりて始はじめて眼めの醒さめたる振うりて澁々しぶしぶと  
 起おき出いれど主人しゅじんの眼めにいまま全くまく寝忘ねわれたるのと  
 虚眠そらぬするのとい見分みわかがつくゆる己おのれの拙つたき根情こんじやう  
 と求もとめて主人しゅじんに見みせるま當あたるなり斯かも一時いつか  
 くりの怠惰たいたをなしたきものか  
 ○おさんの冷飯ひやめしとぞつる心こころのほどいの如何いかにあらん  
 と尋たづぬれば自分じぶんのこれと喰くふを厭いとふまでのこ

となりとの實まことに薄情うすけなきことならせや○さて冷飯ひやめしを  
 ぞつるも一度いさぎの費つひえは些少せうせうあれどもこれを年中いちねん  
 につもれば實まことに驚おどろくべき大費つひえとなるべし昔かみの  
 人ひとの飯めしをぞつれば眼めがつぶれるといふおど  
 しも功き能のうありしが今いまの生なま意い氣きおさんなどに  
 その功き能のうもあらざれば只ただその主婦おなごの眼め玉たまを要よ  
 するのこ  
 ○物の足たらざるとばつぶやき餘あまりあるとば惜おし氣き

なくこれを棄る等ハ奉公人根情よしして主家の  
 損害を患ふ者ハそくなし今その一例を擧げて  
 いへバ物を煮るを醬油、味淋の類を徳利より  
 直に鍋の中に注ぎ若し誤て注ぎ過る時ハこれ  
 よ水を加え而してその不手際を蔽んが爲め无  
 益よこれを棄つることなどのごとし斯る不手  
 際を防んよハ先づその適宜の分量を散蓮花或  
 ハお玉杓子などよはかりて鍋の中よ移るべし

然すれバその適度を誤ることハなけれどたび  
 く示て見せても爲さぬところを見れば此位  
 の事でもヤツパリ面倒だかえらん  
 ○事馴れぬおさんハ薪の數さへ多ければよく燃  
 るものと思ひて徒よ多くくべるものなれど夫  
 れといふのも到底冗費を願ハぬより起ること  
 なれば何一つとして油斷がならず誠よ困つた  
 ものなり

因<sup>つひ</sup>云<sup>い</sup>ふ薪<sup>まき</sup>を多<sup>おほ</sup>くくべて却<sup>かへ</sup>てもゑのどろき  
 理<sup>わけ</sup>の之<sup>それ</sup>が爲<sup>た</sup>めよ竈<sup>くわ</sup>内の空<sup>くわ</sup>氣<sup>き</sup>の流<sup>か</sup>通<sup>よひ</sup>をどろく  
 せむるがゆゑなり一<sup>ひと</sup>体<sup>たい</sup>火<sup>ひ</sup>のゑる理<sup>わけ</sup>の薪<sup>まき</sup>の中<sup>うち</sup>  
 にある炭<sup>たん</sup>素<sup>そ</sup>と空<sup>くわ</sup>氣<sup>き</sup>の中<sup>うち</sup>にある酸<sup>さん</sup>素<sup>そ</sup>といふ二<sup>ふた</sup>  
 つの元<sup>げん</sup>素<sup>そ</sup>が互<sup>たがひ</sup>に結<sup>むす</sup>び合<sup>あ</sup>ふて燃<sup>も</sup>るものなれば  
 空<sup>くわ</sup>氣<sup>き</sup>の流<sup>か</sup>通<sup>よひ</sup>わろきときハ酸<sup>たん</sup>素<sup>そ</sup>もそれ<sup>それ</sup>に隨<sup>つ</sup>て  
 少<sup>せう</sup>きゆゑ燃<sup>も</sup>れかたよるハからず故<sup>ゆゑ</sup>によくこれ  
 を燃<sup>も</sup>さん<sup>さん</sup>にハ適<sup>た</sup>宜<sup>い</sup>くくべて空<sup>くわ</sup>氣<sup>き</sup>の流<sup>か</sup>通<sup>よひ</sup>をよ

くそべし  
 ○おさんハ食<sup>じ</sup>物<sup>ぶつ</sup>を扱<sup>あつか</sup>ふ者<sup>もの</sup>あれば身<sup>み</sup>体<sup>たい</sup>の中<sup>うち</sup>特<sup>とく</sup>て手<sup>て</sup>  
 をバ清<sup>せい</sup>潔<sup>けつ</sup>みそべきはづなるに中<sup>なか</sup>よハ便<sup>てん</sup>所<sup>じ</sup>よ行<sup>い</sup>  
 つた後<sup>あと</sup>の手<sup>て</sup>を洗<sup>あら</sup>ひぬのとならず甚<sup>はなは</sup>しきハ朝<sup>あさ</sup>起<sup>おき</sup>  
 きたま、手<sup>て</sup>を洗<sup>あら</sup>ひずよ食<sup>じ</sup>物<sup>ぶつ</sup>等<sup>ら</sup>と扱<sup>あつか</sup>ふ者<sup>もの</sup>もあれ  
 ど夜<sup>よ</sup>間<sup>ま</sup>寢<sup>ね</sup>床<sup>こ</sup>にて頭<sup>あたま</sup>をかき尻<sup>しり</sup>をかきその他<sup>ほか</sup>何<sup>なに</sup>處<sup>ところ</sup>  
 の厭<sup>いと</sup>ひなくかさちらし又<sup>また</sup>ハ蚤<sup>ひら</sup>虱<sup>しつ</sup>をつぶそこと  
 もあるべければ最<sup>もつと</sup>も厭<sup>いと</sup>ふべきことなり又<sup>また</sup>雑<sup>ざつ</sup>巾<sup>ぎん</sup>

がけをあしたる後の手を洗ふ者も十人よ十一  
 人までいなく又これを不潔と思ふ者も少なけ  
 れどよくよく考へて見れば雑巾といふもの  
 誰れが家よても清潔の物のと拭くものよわら  
 せ板の間や園を拭く人足の底を拭く  
 も同ト又其上に何が落ちてゐるも計られね  
 甚だ不潔きものなり故よ雑巾づけをなしたる  
 手にても亦食物を扱ふのいさらくおこと  
 の

○飯の給仕をなしながら頭をかくなどのこと  
 り申したし  
 とかくありがちのことなれど甚だ汚きことな  
 れバ給仕をなせ者の最もたしなむべきことな  
 り何故なればその頭垢自然食物の中に飛び入  
 ることあるべければなり又常に髪を亂してゐ  
 るいその主人に對して失敬のとならず主家に  
 ていまたその容等に對して恥づべきことなれ

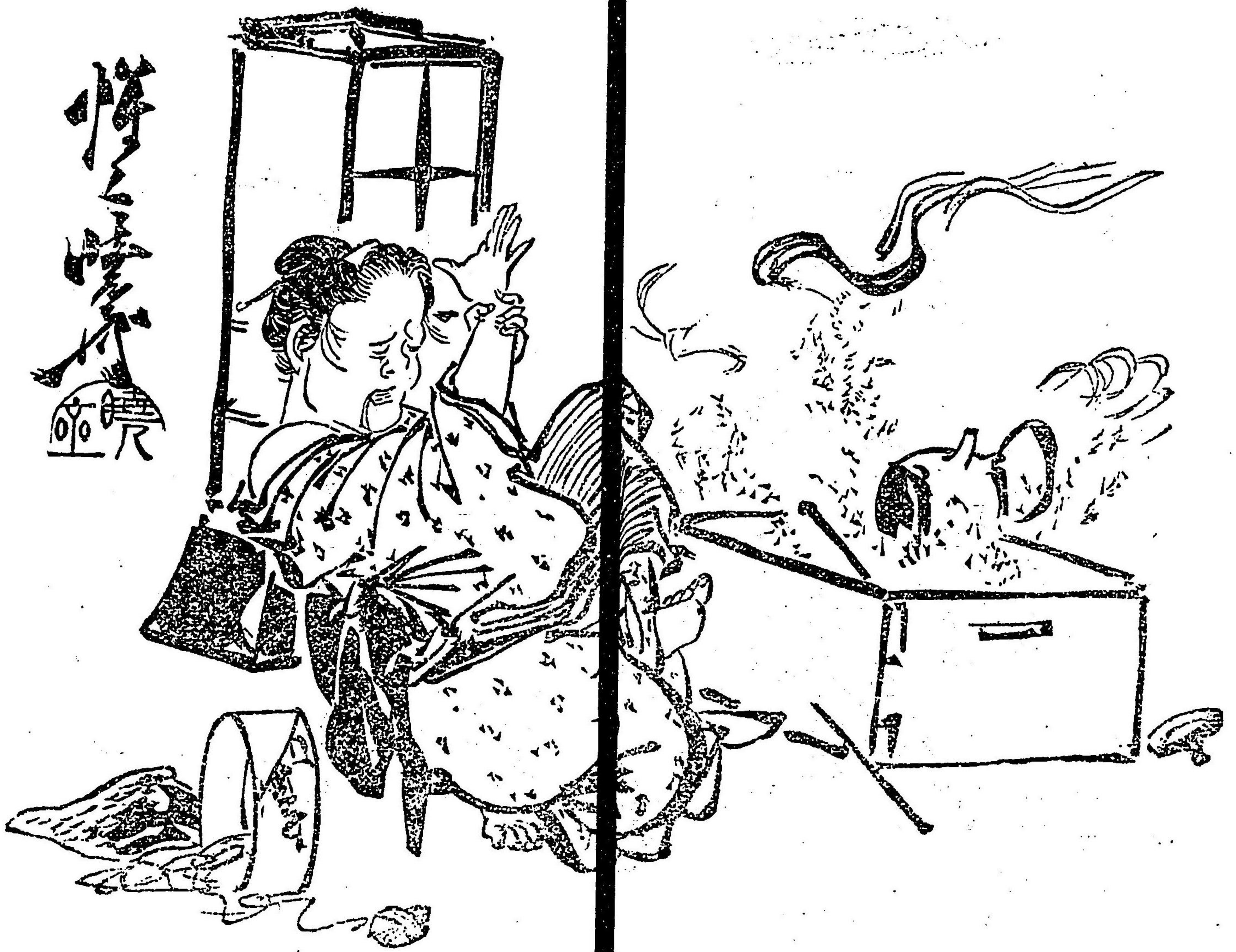


パ常に必ずとりとださねやうありたし然るを  
 かさんなどの髪をさだとも更にさしつかへな  
 きこと、自らゆるせど、その甚だ誤解にて右の  
 不興のいふまでもなく既に前にも云へるがご  
 とくおさんの常に食物を扱ふ者かれバ髪をさ  
 だもときその扱髪いつか食物も交る思わる  
 べし故よおさんとても髪とさだしてゐてよき  
 はづりあるまじ

○角皿、角皿、重箱その他總て角なる器を洗ひ或は  
 拭くを見るにその隅々までよく洗ひよく拭く  
 者甚だ少なし故よとかく角小皿などの隅も食  
 ひのこり物のこびりつきてあるを知らず客の  
 前も出して赤面くことあれば總て角なる器を  
 洗ひ拭きするよその隅のを洗ひ拭きする  
 つもりにて爲すべし然すれば他の部の自然清  
 潔よあるべし又物を拭くに生拭よして拭目を

遺のこりなごの甚はなはだ穢きたかきことなれば濡ぬれ布ふ巾きんにて拭ふきたるをば耳みみび乾かわきたる布ふ巾きんよてよく拭ふきなほそべし

○晝ひる間ま勞はた働たづく者ものの夜よよ至いたり勞つれいで、睡ね眠むを催もよほそも理ことわりなれど霄きりの中うちより居ゐ睡ねするが如ごとき心こころの怠おこりより起おこることなれば決けつして宜よろど云いひがたし又またその甚はなはしきに至いたてハ晝ひる間まにても坐すわれハ直ただと居ゐ睡ねする者ものあり斯かる者ものにハその睡ね涎だれを



将  
家  
火



流して睡りたる醜しき態を寫真にとりて見せ  
 たきことなり然すれば少しの恥ることもあり  
 んか

○奉公人根性として主人の眼前にてはその子供  
 を丁寧扱へど見ぬところでの粗鹵に扱ふの  
 えならき意よかなぬことあるときの子供の  
 尻を搦り頭を槌きなどする者世間も少しとせ  
 ず主人その泣聲を聞て如何したかど問へば只

今御自分で柱にお頭をおあてあされたの滑て  
おころびなされたのと未だ小供の何も言へぬ  
を幸ひ口から出まかせよいひまぎらせどその  
子供のためには害となるの云ふまでもなく智思  
なき小供を責むる心の底を鬼と云はんか將た  
愚なりとや云はん

○ 已れに過失ありて主人の之と叱る時自分の悪  
きことこの全で棚よ上げて却て主人を恨む甚し

さへ主人入よ對して抗抵一或の罵詈り又の呼ば  
るゝも更又聞ぬ爲して應答せぬことなどの十  
人よ九人まであることなれば定めておさんの  
法則よでもあることかまらん

○ 主人の用事を命けるも明と應答せず口の中よ  
てぶつゝ小言をいひながらいやゝその用  
をなす者あれど主人より命けられたることの  
假令可厭でも爲さねばならぬゆるいゝゝ爲

是よりも寧そ勇んでなしたる方が自分もこゝろよくまた命けたる者も氣味よかるべき又斯く爲さぬ所と見れば白尻といふものゝ目方がよつばど重いと見へる  
 ○總て物品を破損して知らぬ爲して濟さんとなそことの最も拙きことよて若し後日顯はるゝときハ餘計又顔を赤くせねばあるまト夫よりも寧そその時疎忽の旨を述ることこそよけれ

然それハ主人に於ても誣て之を責むる理もな  
 くだ、後來を戒むるだけのことにて主人のその品物と搜索などする餘計の手數もなく  
 當人も亦後日顯るゝかと思ふ心配もなくして  
 双方とも心持快しかるべし世間を見るも一旦紛失したる品物の損れて芥溜の隅などより出ることとの例もあれば思ひもよらぬ所より顯れてとんだ恥を受くることもあれば陸歩のガレ

ハ決して爲そまじきことなりとそ  
 ○おさんの身としておかまさんやおむさん  
 の風態を似たがるハ甚だ誤解よてたどひ頭から  
 足の尖まで似たとてにあふものでもなく籠甲  
 の櫛をさして煉さんごの根掛をかけたたり縮緬  
 の衣を着て金巾の襦を巻めるなんぞハ竹又木  
 を接たやうで尙さら醜いきゆる身分相當の風  
 態を爲そほどぞ好まじけれ

○手に臭氣の着くを厭ふて糖味増を攪動そこと  
 をバとかく嫌ふものなれど誰れも知りたるが  
 ごとく糖味増といふものハ攪動セバそれだけ  
 味の佳くなるものなれど若し攪動そことを怠  
 る時ハその味次第又損ト之よ隨て臭氣を生じ  
 て終又ハ廢物となれば毎又怠らず攪動さすハ  
 ならぬものなりたとひ手又臭ひつさても生涯  
 どれぬといふものでいなく石戯で洗へば直又

とれるゆる決して困惱のなきはづなり  
 ○ 雑巾掛をなすよ多くの生し布りの雑巾を用ふ  
 れどこい一時清潔み見ゆれど後よの却て光澤  
 を失ふものなればかたき絞りで拭きたきもの  
 ありその生絞りにする原因のといへばヤツ  
 リ體力を容むより起るならん  
 おさんの穴畢

明治十二年八月二十九日出版御角

著述兼出版人

長野縣士族

望月誠

東京京橋區南鍋町一丁目七番地

東京京橋區南鍋町一丁目七番地

發兌元

うさぎや誠

同 京橋區八官町通加賀町

由巳社

大賣捌所

同 芝區三島町

山中市兵衛



